



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	カリキュラム構想とことばの教育：1949年東京学芸大学三附属小学校の探求(個人研究・共同研究)( fulltext )
Author(s)	工藤, 哲夫
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 37: 157-167
Issue Date	2010-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/107484">http://hdl.handle.net/2309/107484</a>
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

# カリキュラム構想とことばの教育

— 1949年東京学芸大学三附属小学校の探究 —

東京学芸大学附属国際中等教育学校 工藤哲夫

## 目 次

1. 研究の目的	158
2. 検討の対象	158
3. 検討の視点	158
4. 第三師範附属小学校『小学校カリキュラムの構成』	159
4.1 成立過程	159
4.2 単元の類型	160
4.3 能力表の中のことばのちから	160
4.4 中核学習の中のことばの学習	160
4.5 周辺学習の中のことばの学習	161
5. 第二師範附属小学校『小学校の学習計画と指導』	161
5.1 成立過程	161
5.2 単元の類型	161
5.3 能力表の中のことばのちから	162
5.4 単元学習の中のことばの学習	162
5.5 系統的分科学習の中のことばの学習	162
6. 第一師範附属小学校『カリキュラムの構成と実際』（及び『カリキュラムの実験シリーズ2～5』）	163
6.1 成立過程	163
6.2 単元の類型	163
6.3 能力表の中のことばのちから	164
6.4 単元学習の中のことばの学習	165
6.5 基礎学習の中のことばの学習	165
6.6 生活経験学習と系統学習	166
7. まとめと今後の課題	166

東京学芸大学附属学校 研究紀要 第37集

# カリキュラム構想とことばの教育

— 1949年東京学芸大学三附属小学校の探究 —

東京学芸大学附属国際中等教育学校 工藤哲夫

## 1. 研究の目的

昭和20年代前半は、戦前の教育の反省に立ち、コア・カリキュラムを取り込んだ教育計画作りが盛んに行われ、師範附属小学校もさまざまなプランを提案した。

東京学芸大学附属の小学校においても、1949（昭和24）年にプランを提案した著作物を刊行している。その中で、第一師範（旧青山・世田谷）附属小学校、第二師範附（旧豊島・小金井）属小学校、第三師範（大泉）附属小学校の「教育課程」におけることばの教育の位置の特質を明らかにしたい。

## 2. 検討の対象

検討の対象は、以下の三校の著作物である。

### ①第三師範附属小学校

『小学校カリキュラムの構成』（同学社1949. 7）

### ②第二師範附属小学校

『小学校の学習計画と指導』（蓼科書房1949. 10）.

### ③第一師範附属小学校

『カリキュラムの構成と実際』、『学習環境の構成と実際』、『低学年カリキュラムの実際』、『中学年カリキュラムの実際』、『高学年カリキュラムの実際』（カリキュラムの実験シリーズ1. 2. 3. 4. 5.）

（学芸図書1949. 12）

## 3. 検討の視点

国語の学習は、ことばによる認識の深化拡充を日ざすものであり、その認識は実感を伴った言語経験を通してこそ、本当のことばの力になる。「学習者の生活的課題や学習への内的動機に基づく追究活動」<sup>(1)</sup>を行うことで、ことばの認識がより確かなものとしてなされる。しかし、学習活動の要素を分析し、ことばに関する学習の系統性がなければ、学習する部分としない部分が発生し、全体的にはことばの学習が不完全になってしまう。この問題を各附属ではどのように克服しようとしたのかを中心に考察する。

具体的には、1945（昭和20）年以降に作成されたカリキュラムを次の4類型に分ける。<sup>(2)</sup>

- 一 コア・カリキュラム（「生活」を核とする）
- 二 コア・カリキュラム（生活単元）＋基礎課程（または周辺学習）
- 三 コア・カリキュラム＋教科教育
- 四 各教科独立（適宜他教科と融合する場合も）

そして、この四類型の中で、ことばの能力のどの部分に焦点を当て、ことばの学習が行われたのかを考察する。

#### 4. 第三師範附属小学校『小学校カリキュラムの構成』

##### 4.1 成立過程

『小学校カリキュラムの構成』は次のような研究活動を通して1949年の研究発表会で発表された。<sup>(3)</sup>

1945（昭和20）年11月 「新教育方針指示講習会」

1947（昭和22）年2月 「新教育講習会」

（討議法・児童自治・問題法・自由学習・社会 研究・単元学習）（第三師範附属小学校の教員の個人の著書になっているが、次のものにもとづいて「新教育 講習会」が開かれた）

室田昂、染田屋謙相『討議法』（1946.8）

近藤修博、金児賢治『自由学習』（1946.10）

大塚三七雄『新しい学校』（1946.12）

池田芳雄、木暮強『児童自治』（1947.1）

大井安美、相原勇『問題法』（1947.1）

1947（昭和22）年10月 「社会科研究発表会」（社会科・各科・自由研究・集会について）

1948（昭和23）年3月 文部省実験学校に指定。

1948（昭和23）年7月 『社会科の実践』木暮強、染田屋謙相 著

（この著書は、「社会科研究発表会」をまとめたものであり、『小学校カリキュラムの構成』の基盤になった。）

1949（昭和24）年6月 研究発表会「生活カリキュラム」『小学校カリキュラムの構成』

##### 4.2 単元の類型

社会的機能は社会科学習内容選択の基準になるものであるが、アメリカの先行研究を基盤にし<sup>(4)</sup>、教員が批判を加えて、次の七項目に整理しスコープとした。

a. 生命の保全 b. 生産と消費 c. 資源の保全 d. 交通・通信・運輸 e. 教育（学問・宗教・芸術を含めて） f. 政治 g. 厚生慰安（pp.34-35）

そして、児童や地域の実態を調べ、課題表（pp.95-99）を作成し、次のような単元を設定した。

一年 学校 家庭

二年 農園 停車場 近所の人々

三年 動植物と私たち 町といなか 西武鉄道

四年 郷土の生活 武蔵野の秋 東京の発達

五年 衣食住とその資源 交通と運輸

日本の政治

六年 機械文明 宇宙とわれわれの住む地球

日本と国際社会（p.116）

一年の「学校」は一・二学期に、それ以外は一学期一単元で、毎日八十分実施された。（p.240）

単元学習を実施するにあたり、日本の現状では生活カリキュラムが未だ未熟であるからとして、次のような考え方にに基づき、「二 コア・カリキュラム（生活単元）+基礎課程（または周辺学習）」という立場をとった。

生活カリキュラムを分析してみると、中核学習と周辺学習（共に教科ではない）の二つに分けることができる。しかし厳密な意味でいうと、周辺という言葉で分けることもおかしいのであって、理想的にいえば児童の価値ある生活経験の中から選び出された中核学習に全部含まれてしまうわけであるが、現段階においてはまずこの二つに分けて考えるのが妥当のようである。（p.248）

#### 4.3 能力表の中のことばのちから

能力表は、生活カリキュラムの学習を行うことで、基本的能力の低下を招くことを防止するために設定された。

国語能力なり、数量的能力なり、あるいは歴史的地理的知識乃至図画工作・音楽等の技術の基本的能力において、その低下が著しいとの批判がある。われわれはこの批判に対して次のような立場をとっている。(中略) d、日本の現状においては、生活カリキュラムの研究とその構成が未熟なため、基本的知識・技術の面においてかなりの低下が考えられているが、この実情を率直に肯定して、基本的知識・技能の指導が、単元学習の中において早急に工夫されなければならない。

このような見解に立つわれわれは、単元学習の計画とその展開において、能力表の作製を行い、その利用を綿密に計画して、単元学習が批判されまた陥りやすい基本的能力や技術の低下を救おうとしている。(pp.227-228)

能力表の中の「ことばのちから」は、「国語能力表」に次のようにまとめられている。

「聞く能力」	12項目
「読む力」	31項目
「話す能力」	22項目
「文を綴る能力」	43項目
「語法の能力」	17項目
「参考書を利用する能力」	11項目 (pp.314-323)

ここでは、「紙芝居や脚本」「手紙やラジオや新聞」に関する活動が早い時期からなされ、演劇や情報活用が重視されている。文学では、低学年では童話が中心であり、文学的な読み物は高学年に比重がある。また「参考書を利用する能力」が国語の能力として取り上げられており、「単元学習に利用できる書物を見つける」など調査・研究活動を重視している。

#### 4.4 中核学習の中のことばの学習

ここでの中核学習とは、「児童の日々の生活経験に統一と組織を与えるため、その中で特に重要だと思われる課題を設定して単元素構成」したもので、「生活全体の中核として学習を展開」した。この単元学習の中ではことばに関するものは「言語」とよばれている。(pp.248-249)

中核学習の中でことばの学習(「言語」)にどのようなものが設定されたのか、「六年一学期 機械文明(pp.203-210)」から「新聞」の項からあげる。

「新聞の読み方」「評論を読む能力」「新聞記事を書く力(学級新聞・投稿)」「壁新聞をよみ、かく能力」「報告書を書く能力」「要点を短くまとめて書きとる」「要点を速記する(よく聞いて要点をつかむ。落ち着いて速く書く。略語もつかう。)」

文芸作品の扱いは、「六年二学期 宇宙とわれわれの住む地球(pp.210-215)」の「3月の観測と伝説」で、「俳句や短歌を味わう」「詩を味わい、そこにひそむ思想性について心をむける」「文芸作品を読む」「詩的表現をする」が挙げられている。月の伝説ということで文学作品を読ませている。

演劇に関しては、一年の最初の単元「学校」で「紙芝居を作る(p.122)」で始まり、六年最後の単元「日本と国際社会」で「シナリオを書く」「脚本を書いて演出する(p.218)」など、各単元で毎回取り上げられている。

#### 4.5 周辺学習の中のことばの学習

周辺学習は「単元学習の途上痛切に必要な迫られた」能力の練習を行うのであり、「練習の必要を児童自身が痛切に自覚することによって、はじめて意義ある練習」をすることができるとしている。ことばの学習の例として「文を読む力」だけをあげている。(p250) 単元学習がスムーズになされるための道具としての意識が高い。

### 5. 第二師範附属小学校『小学校の学習計画と指導』

#### 5.1 成立過程

『小学校の学習計画と指導』は次のような研究活動を通して、1949年の研究発表会で発表された。<sup>(5)</sup>

1947（昭和22）年3月 研究発表会「文化活動について」

同6月 研究発表会「新しい各科学習指導法の研究」『新しい各科学習指導法の研究』

同11月 『社会科と自由研究を試みて』

1948（昭和23）年4月 文部省実験学校に指定。（図工・音楽・体育）

1949（昭和24）年11月 研究発表会「小学校の学習計画と指導」『小学校の学習計画と指導』

#### 5.2 単元の類型

社会科の学習活動の目標達成を重点に置きながら、単元を設定した。

一年 私たちの学校（一学期）

丈夫なからだ（一学期）

私たちの家とおみせ（二学期）

おともだち（三学期）

二年 二年生の春（一学期）

近所の生活（一学期）

田舎と町（二学期）

郵便（三学期）

三年 自治会（一学期）

私達の町（二学期）

動植物と私達の生活

町の病院（三学期）

四年 東京の今と昔（一学期）

資源の保護利用（二学期）

昔の商工業（三学期）

五年 衣食住の改善（一学期）

交通通信の発達（二学期）

東京都の復興（三学期）

六年 ラジオと新聞（一学期）

健康生活（一学期）

近代工業（二学期）

日本と諸外国（三学期）

よりよき社会（三学期）（p.25）

単元学習を実施するにあたり、以下のような考え方にに基づき、「系統的な学習体系」を重視し、「三 コア・カリキュラム+教科教育」という立場をとった。

そこで本校では、社会科の学習活動には、社会科本来の目標達成に重点を置きながら、他の教科の学習活動と自然に然も有効に関連するものを含ませている。然し又他の教科はそれぞれ独自の価値と使命とになった系統的な学習体系をもって、継続的に一貫した指導がされねばならない。従って社会科の単元学習と相まって系統的な分科学習の計画を立てたのである。（p.24）

社会科の単元学習の時数と国語の時数は以下の通りである。

社会科の単元学習「11・11・10・8・8・8」

国語「3・4・4・6・5・5」（左から一年）

### 5.3 能力表の中のことばのちから

学習計画は「文部省の学習指導要領を忠実且つ具体的に実現していくことにつとめている（pp.23-24）」とし、独自の能力表の作成はない。

### 5.4 単元学習の中のことばの学習

単元学習は、基本的には「社会科の単元学習」という位置づけであり、低学年では、いままでの指導の経験から「生活単元」を構成している。（p.24）

単元学習の中でことばの学習のどのようなものが設定されたのか、「六年 1 学期 新聞とラジオ（p121-125）」から「新聞」の項の例をあげる。

「新聞の読み方を知る」

「壁新聞を工夫して上手に作れる」

「作文」

単元学習の中で、取り立てて、「指導の方法」としてあげている中に、ことばの学習として重要なものとして、「話し合い」「見学・調査」「作文」をあげている。

「話し合い」では、「他の者の意見をききながら、自分は、『こう思う』と自主的に考えをまとめ、且つ発表するところから個性のはっきりとした人物が形成される」という「教育的価値」があげられている。（p.156）

「見学・調査」では、「計画」「資料の選択と吟味」「記録とその整理」「報告の方法」などがあげられている。（P170）

「作文」では、「創作的作文」と「実用的作文」があげられている。前者は「国語において行われる作文指導」とし、「生活記録・感想・物語・随筆・シナリオ」などをあげ、後者は「社会科・理科その他においてなされる作文指導」とし、「記録・報告・観察日記・手紙」などをあげ、国語に入れていない。作文指導計画は「国語」「社会」「その他」の三つに分けて考えている。（pp.177-178）

調べ学習を国語の領域とは見ていないようである。

### 5.5 系統的分科学習の中のことばの学習

各教科の学習を系統的分科学習とし、ことばの学習を「国語」という本来の名称で使用している。「六年一学期 新聞とラジオ」の「新聞」の項との関連では、「単元学習と分科学習との関連をはかるべきもの（p.28）」として、「新聞の海外ニュースとの関連」が国語の学習として記されている。これは、国語の教科単元でこの時期に行う「みどりの野」の発展学習として設定されている。

## 6. 第一師範附属小学校『カリキュラムの構成と実際』（及び『カリキュラムの実験シリーズ2～5』）

### 6.1 成立過程

『カリキュラムの構成と実際』は次のような研究活動を通して1949年の研究発表会で発表された。<sup>(6)</sup>

1947（昭和22）年2月 研究発表会（国語科）「国語におけるユニット学習」

1947（昭和22）年12月研究・発表会「新しい社会科の進め方」『新しい社会科の進め方』

1947（昭和22）年12月 『単元による低学年理科の実際』

1948（昭和23）年4月 文部省実験学校に指定。（学校図書館）

1948（昭和23）年5月 新カリキュラムの基礎的研究に着手

1948（昭和23）年6月 研究発表会「単元による理科指導」『単元による高学年理科の実際』

1948（昭和23）年秋 CIE図書館指導官イースト・リック氏来校

1949（昭和24）年1～3月 CIE図書館指導官ジェーン・フェアウェザー氏来校

1949（昭和24）年11月 研究発表会「図書館教育」『小学校の図書館教育』

1949（昭和24）年11月 研究発表会「カリキュラムの実験研究発表会（生活経験教育課程）」

『カリキュラムの構成と実際』（及び『カリキュラムの実験シリーズ2～5』）

### 6.2 単元の類型

スコープは、文献的研究<sup>(7)</sup>と地域の実態調査による分析で次の十項目を設定した。

- (1) 生命財産の保護保全
- (2) 自然資源の保護利用
- (3) 物の生産
- (4) 物の分配・消費
- (5) 物の運搬
- (6) 交通・通信
- (7) 厚生・慰安
- (8) 教育
- (9) 美的宗教的表現
- (10) 政治 (pp.43-44)

そして、児童の発達段階と地域の実態を踏まえ、課題表を作り、次のような単元を設定した。

一年 たのしい学校（約30時）（4月）

じょうぶなからだ（約81時）（5月）

おともだち（約39時）（6月）

なつのあそび（約40時）（7月）

秋の学校（約95時）（9・10月）

学校の近所（約80時）（11月）

わたくしのうち（約82時）（12・1月）

たのしい学び会（約35時）（2月）

もうじき二年生（約35時）（3月）

二年 二年生になって（約86時）（4月）

私のうち（約46時）（5月）

丈夫なからだ（約58時）（6月）

たのしい夏（約76時）（7・9月）

たのしい秋（約75時）（10月）

町の人（約105時）（11・12月）

たのしい冬（約105時）（1・2月）

もうすぐ春（約43時）（3月）

三年 私たちの学校（約59時）（4・5月）

- 私たちの生活（約70時）（5・6月）
- 夏の生活（約46時）（6・7月）
- 郷土の交通（約60時）（9・10月）
- 秋の学校（約58時）（10・11月）
- 郷土の慰安（約72時）（11・12月）
- 冬の生活（約67時）（12・1・2月）
- 私達の町（約46時）（2・3月）
- 四年 学校自治（約53時）（4・5月）
- 大昔の生活（約75時）（5・6月）
- たのしい生活（約74時）（6・7・9月）
- 武蔵野の秋（約68時）（9・10月）
- 世田谷の発達（約92時）（11・12月）
- ひらけゆく東京（約96時）（1・2月）
- 安全で便利な生活（約12時）（3月）
- 五年 よい家庭生活（約70時）（4・5月）
- 郷土の文化施設（約48時）（6月）
- 日本の農業と生活（約72時）（7・9月）
- 自然資源と生活（約72時）（9・10月）
- 日本の工業（約72時）（11・12月）
- 日本の交通（約72時）（12・1月）
- 日本の政治機関（約84時）（2・3月）
- 六年 貿易（4・5月）（約81時）
- 生活の合理化（5・6・7・9・10月）（約127時）
- 外国の生活と日本の生活（10・11・12月）（約121時）
- のびゆく文化（1・2・3月）（約116時）

第一師範附属小では、学校全体の学習を「経験学習」ととらえ、「経験学習」を、経験単元の学習である「生活学習」と、経験単元学習におさまりきれない教科学習の「基礎学習」と、保健衛生のための「健康学習」の三つに分けて考えた。次のとおりである。

経験単元の学習だけではおさまり切れないものがあってそこから派生して特に指導を要する基礎学習と、本校の特殊事情もあって児童の保健衛生をはかる健康教育との三方向を持つこととなる。表解するならば

- |      |   |  |
|------|---|--|
| 経験学習 | { | <ul style="list-style-type: none"> <li>一、生活学習－生活経験中心</li> <li>二、基礎学習－言語、数・量・形、<br/>音楽・造形等、特に継続的練習を必要とするもの</li> <li>三、健康教育－保健・衛生（p.60）</li> </ul> |
|------|---|--|

ここから、類型は「二 コア・カリキュラム（生活単元）＋基礎課程（または周辺学習）」と考えられる。

### 6.3 能力表の中のことばのちから

ここでの能力表は、経験学習を実現するために考えられたもので、教科の枠にとられない項目を次のよう

に設定した。

- (1) 言語能力
- (2) 数量形能力
- (3) 道具の使用能力
- (4) 家事の処理能力
- (5) 問題解決能力
- (6) 事態反応能力
- (7) 音楽の能力
- (8) 美術製作の能力
- (9) 健康の習慣及び身体能力 (p.160) (資料4)

それぞれの項目は、あえて細分化しないとしている。「言語能力」は、四三項目あげられており、例えば、「子供の新聞が読める」「八百字程度の作文ができる」「報告文を書ける」などがある。また、「脚本を読める」は全学年になっているが、詩・短歌・俳句を作ることは高学年にあり、小説を読むことは設定されていない。

特徴としてあげられるものは、「問題解決能力」と「事態反応」で、前者には「資料を集めて整理することができる」「参考書を利用することができる」などがあり、後者には「議事を統括することができる」「ごっこ遊びや劇化の計画を立てることができる」などがあり、情報活用や話し合いに関しての能力を重視している。(p.166)

#### 6. 4 単元学習の中のことばの学習

単元学習は「お仕事（経験学習）」という言葉で呼ばれた。

第六学年の三学期に「のびゆく文化」という単元が設定されている。その中で新聞に関する目標をあげると、理解目標として「新聞のはたらきと歴史」「新聞のできるまで（機械化）」、技能目標として「相手のいうことを批判できる」「問題をよくつかむことができる」「資料を集められる」「参考書その他の資料を活用できる」「新聞の要点がよめる」「物事を比較観察し関係的に考えられる」「事実から筋道の通った考え方ができる」「報告文がかける」「構成力・演出力」があげられている。(p.145)<sup>(8)</sup>

「小説を読む」などの設定は見られず、演劇の活動は、一年の「たのしい学び会」、二年の「町の人」と「もうすぐ春」、四年の「大昔の生活」と「ひらけゆく東京」で行われ、演劇を用いた表現活動や活動をまとめる方法は、高学年では重視されていない。高学年でのまとめる方法は報告書を作ることが中心になっている。

#### 6. 5 基礎学習の中のことばの学習

基礎学習は「お稽古」という言葉で呼ばれ、内容で次のように五つに分類した。

- ①言語に関する学習
- ②数・量・形に関する学習
- ③音楽に関する学習
- ④造形に関する学習
- ⑤図書館その他の基礎学習 (pp.70-71)

「①言語に関する学習」の指導するに当たり、「言語基礎学習系統案」を、「文部省学習指導要領国語科編」と、当校児童の言語発達段階を考慮して作成し、次の点に留意しながら指導に当たった

- (1) 常に言語学習として、目的的な指導をすること。(中略)
- (3) 国語教科書の要素内容を、経験学習の参考に用いることは望ましいことであるが、これで言語の学

習指導が十分に果たされたと考えてはならぬこと。もちろん、この場合でも、言語学習という点に意を用いること。」などがあげられている。

(中略)

- (5) 言語の基礎学習といっても、従来の国語学習と変わるものではない。できるだけ児童の生活と結びつけ、興味を持って学習するように工夫し、更に、児童の言語能力の個人差を十分考慮して指導すること。(p.76)

ここでは、ことばの学習そのものの重要性に目を向けている。

## 6.6 生活経験学習と系統学習

『カリキュラムの構成と実際』では単元学習を強く押し進めてきたが姿が見られる。しかし、学校全体では、実験実証のために、一学年三クラスの中で、単元学習のクラス、系統学習のクラス、低学年は単元学習で高学年は系統学習のクラスという体制で研究がなされている。これは次の理由からである。

私共の学校は、児童を教育する本質的な使命の他に、附属学校として特殊な任務をもっている。すなわち、大学の研究施設であり、教生の観察・参加・実習の機関であり、実験実証をしなければならない。(p.7)

第一師範附属小学校では、1952(昭和27)年4月に「生活経験・教科・複合の三種のカリキュラムの実証的比較研究」の文部省実験学校に指定され、研究発表を行っている。

## 7. まとめと今後の課題

第三師範附属小では、カリキュラムの中で生活単元を重視し、能力表で国語能力を細かく分析し、それによってことばの学習も生活単元の中で、保証しようとしていた。「小説を読む」などの文学の取り扱いも、単元学習では比較的少なく、周辺学習でなされていたようである。また、「参考書を利用する能力」など調べ学習に関する力を国語に位置づけている。

第二師範附属小では、単元学習は社会化を中心に行い、ことばの学習は国語の時間に体系的に学習しようとした。作文を「創作的作文」と「実用的作文」に分け、後者を「社会科・理科その他においてなされる作文指導」とし、情報活用学習を国語と別のものにしようとした。

第一師範附属小は、基礎学習を教科の分類ではなく、独自のものとし、「ことばの学習」に関しては「言語」という名称にしたが、「言語基礎学習系統案」は学習指導要領の国語科にしたがって作成した。「言語」といっても従来の国語に沿っていた。能力表では、教科の枠にとらわれない能力を分析し、「ことばの学習」に関する能力として、「言語能力」「問題解決能力」「事態反応能力」などを提案した。「言語能力」の中に「報告文をかける」などがあり、「問題解決能力」「事態反応能力」で、調べ学習や話し合いに関する能力が更に出されている。また、すでに、「生活経験・教科・複合の三種のカリキュラム」に目を向けた研究を推し進めており、単元学習は一つの選択肢として実施されていた。

今後の検討課題として、調べ学習と国語の位置があげられる。単元学習における調べ学習の位置は高いが、調べ学習のどのレベルまでが国語と考えられていたのかを明らかにする必要がある。第二師範附属小学校では調べ学習と国語科を別のものとして考えていた。第三師範附属小学校では、調べ学習の能力が国語科と社会科の両方の能力表に出されている。第一師範附属小学校では、調べ学習の能力を、国語以外に「問題解決能力」「事態反応」という項においた。ここには、単元学習にどこまで国語科が道具教科になりうるのかという問題がある。

また、単元学習と小説を読むなどの文学の取り扱いの問題がある。第三師範附属小学校では能力表にはある

ものの単元学習での取り扱いが小さい。第一師範附属小学校では、「小説を読む」という能力が分析されていない。

これらの二つの点などを検討して更に、東京学芸大学三附属小学校の単元学習の中の「ことばの学習」の特質を更に明らかにしていきたい。

#### 《注記》

- (1) 田近洵一「総合主義の時代における国語教育」『戦後、昭和二〇年代における総合主義教育の研究—国語教育の視点から—』（科学研究費研究成果報告書）2003（p.3）
- (2) 浜本純逸「明石附小プラン（昭和二四年三月）の考察」『両輪』第四二号2004（p.2）
- (3) 主に『五十周年記念誌 大泉の教育』1989.10と『東京学芸大学二十年史』1970.3を参考にした。
- (4) 『小学校カリキュラムの構成』には明示されていないが、新しいカリキュラムに関して『新しい学校』で、教科課程編成上の規準は「Education in the Elementary School」（H.L.Caswell）を参考にしp.96、教育課程編成の諸類型に関しては「Maryland School Bulletin, Vol. X X III」を参考にしているpp.96-98。  
また作業単元や発達段階における単元の配当は「The Activities Curriculum in the Primary Grades」（M.P.Stevens）を参考にしている（pp.99-107）。この中には児童の発達段階に応じた単元の配当の例として、「メリアムの学校」「タワ・ヒル・スクール」「フランシス・パーカースクール」「スチブンス」「リットル・レッド・スクール・ハウス」（pp.103-107）が挙げられている。
- (5) 主に『撫子八十年』1988.11と『東京学芸大学二十年史』1970.3を参考にした。
- (6) 主に東京学芸大学附属世田谷小学校『わが校九十年のあゆみ』1966.3と『東京学芸大学二十年史』1970.3を参考にした。
- (7) 昭和22年に研究がなされた「社会科の進め方」「理科学習の実際」の時に練られたカリキュラム（p.4）と、川口市、福沢村など（p.23）の「九つの研究報告」と、「米国のN・E・A・カリフォルニア案、サンタバーバラ群案、オレゴン・ペンシルヴァーニヤ・ヴァージニア及びミシシッピー等諸州の研究」（p.43）の文献的研究をした。
- (8) 『高学年カリキュラムの実際』のページ。